

献辞

経済学部社会システム学科の鈴木正仁教授は平成20年7月12日に満65歳の誕生日を迎えられ、平成21年3月31日をもって定年退職されることになりました。

鈴木先生は、昭和41年3月に京都大学文学部哲学科（社会学専攻）を卒業された後、同年4月京都大学大学院文学研究科修士課程社会学専攻に進学、昭和44年3月に同修士課程を修了、さらに、同年4月に同博士課程社会学専攻に進学、昭和47年3月に同博士課程を単位修得退学されました。

昭和47年7月に京都府立大学文学部専任講師に就任され、昭和54年2月に愛知県立大学文学部助教授へと転任されました。その後、平成元年4月に滋賀大学経済学部教授に着任され、爾来20年間、滋賀大学経済学部と経済学研究科における教育と研究に尽力されました。

先生の研究について概略を紹介させていただきますと、大まかに言って、二つの分野で行われてきたように思われます。一つは、マックス・ウェーバーの社会学の研究であり、もう一つは、高度成長を境にした日本社会の変化についての分析でした。

前者は社会学の泰斗であるウェーバーの社会学を現代社会を読み解く理論として再構成しようとするものであり、単著『ウェーバーの社会学—現代社会への視角—』に示されています。また、その研究の一部は英訳され外国のジャーナル誌に掲載されています。

後者は、日本社会が高度成長の前と後ではどのように変わったか、その全体的・構造的な変動の分析に取り組むものであり、単著『現代日本社会論—豊かな社会の病理—』、編著『高度成長の社会学』に結実しています。さらに、単著『ゲーム理論で読み解く現代日本—失われゆく社会性—』では、現代日本の社会が直面する諸課題に最新のゲーム理論を使って迫っています。

鈴木先生は個人研究のみならず、研究の交流を進めるべくシンポジウムを積

極的に組織され、その成果として編著『自己組織性とは何か』と編著『複雑系を考える―自己組織性とは何かⅡ―』を刊行されました。これらは自己組織性や複雑系といった社会科学の新しい理論展開と可能性を探求するものでした。

さて、教育の面では、学部で、「現代社会論」、「科学方法論」、「社会学概論」、「現代社会を見る目」、「外国語文献研究」、「専門演習」などを担当され、また、大学院研究科では、「現代社会論特講」、「リスクの社会学特講」、「演習」などを担当されました。そして、ゼミ活動を中心に、学生を熱心に指導してこられました。学生から慕われた本学部の名物教授であったと言ってよいと思われます。

校内行政については、大学の評議員を務められ、また学部の学務委員長、入試委員など多くの役職で尽力されました。特に、社会システム学科の創設に際して人一倍の奮闘をなされて、現在の学科発展の礎を築かれた功績はここに特記すべきことでしょう。

社会活動として、滋賀県地方労働基準審議会会長、KCN 京都 (CATV) 番組審議会会長などに就任され、地域社会への貢献にも尽力されてきました。

社会システム学科の草創期をともに過ごした者として、先生が本学部を去られることは大変寂しいことでもあります。

滋賀大学経済学会は、先生の多年にわたるご功労に対する敬意と感謝の気持ちを表すべく、『彦根論叢』の本号を先生と親交のある方々の論文によって編集いたしました。ご退職の記念として、謹んで先生に献呈させていただきます。

先生におかれましては、今後ともますますご健勝にて過ごされますように心よりお祈り申し上げます。

平成21年3月

滋賀大学経済学会長 小西中和